

平成20年3月

なげださない

所長 稲垣 一則

ちょっとしんどいと、親が子どもをなげだし
子どもは老いた親をなげだし、
メ - カ - も 商社も信用をなげだしてしまう。
ちょっとつらいと、勤め人は会社をなげだし、
国のリ - ダ - までもが、この国をなげだした。

こんな文章がプロロ - グに書かれている「なげださない」と言う本が今店頭に並んでいる。著者は、諏訪中央病院名誉院長の鎌田實先生。精力的にマスコミにも顔を出し、チェルノブイリ支援のためボランティア団体を設立し、これまでに14億円分の医薬品や医療機器を送り、戦争状態の続くイラクの子供の医療支援また地域と一体となった医療を目指し、実践されてきた医師である。

この本は、アルコール依存者、被爆者、末期ガンと闘う歌手、震災によるPST D 傷害者等々「なげださない」生き方をしている人々の実話集です。

アルコール依存症のヒロさん。

商売にも失敗し、多額の借金を抱えたある日、家族が忽然と消えてしまった。心機一転やり直したが、不安や寂しさから10日間飲み続け、入院。そして退院して3日目、雪にはまって立ち往生していた軽トラを助け、そのお礼が缶ビール4本。これでまた火がつき、平成16年元旦の日に緊急入院。ここで鎌田先生との出会いがあった。諏訪中央病院では毎週火曜日の夜に「酒害者回復クラブ」の会合があり「酒をやめつつける」ための同志の会が催されている。ここには病院のスタッフも自主的に参加し、メンバ - を支えているという。「依存症」には「克服」というゴ - ルはなくとも、ヒロさんは自分を変えることに「なげださず」、泥沼からは飛立っている。

感動したのは第7章の「死を背負い歌い続けたシンガ - m i c o さん」。

以前TVにも特集されたこともあり、ご存じの方もおられると思いますが、この本のなかで、唯一亡くなられた人である。もともと病弱であった彼女であったが、29歳からジャズシンガ - としてライブハウス等で歌うようになって2年目、彼女は悪名高きスキルズ性胃ガンになっていた。それから亡くなるまでの4年間、壮絶な病気との闘いと歌にかけた情熱、望外の大阪ブル - ノ - トでの死を背負ったライブ・・・もう1枚CDアルバムをつくりたいと願いつつ昨秋11月8日、彼女は35歳の人生を閉じた。

この本は、ただの感動話を集めただけの「お涙頂戴」の内容ではなく、鎌田實がこれら10の物語の“当事者”として関わってきた(いる)ものであり、こんなスゴイ人がいるんだ、ということが実感されます。そして、こうした鎌田先生の活動に、NPO、NGO、各界の著名人、企業等々の支援がリンクしている状況がよく見えてきます。マスコミに取り上げられないと顕在化しない社会活動、故に「利」を求めてマスコミに取り上げてもらうための社会活動。そんな表層的なものでない、なげださない「本物」がここに詰まっている気がします。

有名な北海道：六花亭のチョコレートが、こうした活動を支援していると知りました。どうでしょう、来年のパレンタインにはこうした支援に繋がるチョコレートを選択肢として一考されては如何でしょうか。

参考：鎌田實著「なげださない」集英社刊